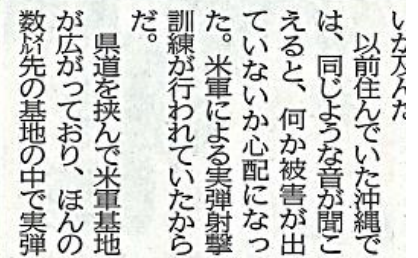


宇治市歴史資料館 パノ



大「陸」し「漢」しい「地」軍
が繰り上げられた沖縄戦
から76年がたった。南山
城村に日本軍として沖縄
戦を体験した男性がい
た。すでに亡くなったが、
交流のあった人から、沖
縄から生還した戦友でつ
くる「昔陽会」が毎年沖
縄に慰霊参拝に行ってい
たと聞いた。

かな色使いが人気を集めたという。

吉田が手掛けた13年の「京阪電車御案内」は路線図に名所の簡単なイラストを加えたものだが、30年の「宇治

名勝御案内」は平等院など宇治の中心部を詳細に描きつつ、彦根や大阪も視界に入れた彩り豊かな地図で、画風の変化が分かる。

日中戦争が始まる

と、パノラマ地図は空対策や華美さが問となり、41年の「巨池干拓完成之図」は建物や少数しか載せず、色彩も淡くなった。

担当した藤岡琢也学

担当した藤岡琢也学

京田辺市の「京田辺農福観地域づくり協議会」が、同市内で育てた大麦とホップ、湧き水を原料にしたクラフトビールの製造を目指している。今年は大麦とホップの栽培に挑戦。今後数年をかけて商品化を目指す計画で、オール京田辺市産の地ビールを夢に描く。

協議会は農業や福祉、商工などの団体が、地域の魅力発信に取り組もうと昨年発足した。遊休農地の活用を考える中で、近年、全国的にブームのクラフトビールに着目。材料を一から生

商品化を目指す

産して農業振興につなげ、地元の新たなお土産にもしよう」と企画した。

栽培する大麦はゴールデンメロンという品種。明治時代、綴喜郡普賢寺村（現・京田辺市普賢寺）出身の田宮龍太郎という人物が普及に取り組んだとされ、府内でのビール用大麦生産の端緒となったという。

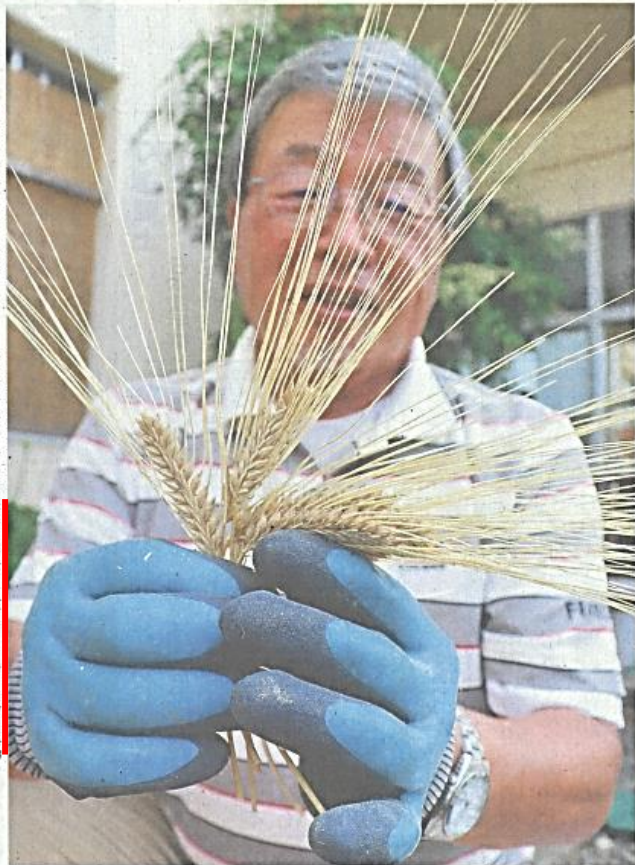
同品種の種50粒を、遺伝資源を保存する「ジーンバンク」から分けてもらい、昨年11月、障害者就労支援事業所・さんさん山城（同

市興戸)の畑にまいた。利用者らが丹精を込めて世話を続けて約2000の穂が実り、6月上旬に約500kgの種を収穫した。ホップは普賢寺の耕作放棄地約1畝に50株を植えて育てており、8月に収穫を予定する。

ビールを醸造できるだけの収穫量を得るまでには3年ほどかかる見込み。同協議会の岡本和雄会長(72)は「大麦生産という地元の歴史を継承し、農業、福祉、観光に携わる人たちのつな

（近藤大介）

収穫した大麦の穂。約500gの穂が取れた（京田辺市興戸・さんさん山城）



遊休農地活用 数年かけ商品化目指す